

「言葉」と出会い「物語」を創る（震災から考える 第3回）

著者	吉田 暢
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	200
ページ	56-57
発行年	2012-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003982

「言葉」と出会い 「物語」を創る

吉田 暢

●「忘れないで欲しい」

「長く続けて欲しい」

東北を歩いてみると、心に留まる言葉に出会う。いったい彼らはなにを「忘れないで欲しい」のだろうか。なにをどのように「長く続けて」いくことが望まれているのだろうか。あまりに多くの命や有形無形の財産が失われたなかで、突きつめてみると「失われたもの」は何だったのか。彼らの言葉の向こうにあるものを探すために、このことから話を始めたい。

人は生まれながらにして独りではない。一人の人間の誕生には、少なくとも二人の別の人間が関わっていることは生物学的に疑いがない。そしてこの二人の誕生には別の四人の、この四人の誕生には別の八人の豊かな出会いがある。あるいは時間を遡るばかりではなく、明日生まれてくる新しい命は、別の命と

出会い、また新しい命を育てていく。この関係性というものは、地域、世代、職業といった社会的な紐帯によってもつながっている。同性婚だって出会いのひとつだし、離婚といった一般的にネガティブに捉えられがちなことも、長く広い見方をすればつながりのひとつかもしれない。

人は自らのルーツや生い立ち、今日へと歩んできた道、そしてこれからの人生について、その手のなかに在ることがあたり前であるかのように、特別な意識を持って向き合わない。まれに大きな病気や、事故を経験した人がこのことについて考え直した、という話は聞いても、それを真に我がこととして深く思慮することは多くない。遠い祖先から祖父母、両親を経て自分を通して、子孫へと続いていく系譜、その過程で縦横の糸で

無数に織られた「人間の絆」とこれらが紡ぎ出す出来事、記憶、想い。これは他人に語ろうと語らずとも、その人に固有の愛すべき「物語」である。ただあたり前に在りすぎることの「物語」に、現代社会の過ぎゆく日常において、あらためて想像力を持って想いを馳せることは少ない。

いみじくも、かの地において「失われたもの」は、古から脈々と流れ、これからも連続と滲えられていくはずの「物語」だったのではないか。ときにはうつつとしくすらあつた両親の説教、明日にしようと思事をしなかつた友人からのありふれたメール、週末にデートの約束をしていたのにケンカをしてそのままになっていた恋人、来週から新規顧客開拓に取り組もうと意気込んでいた同僚。人、場所、想い、願い。私たちの誰もかあたり前に抱えている「物語」。明日も明後日も続くと思っていた、存在の確かさを疑うこともなかつた「物語」が、ある日突然途切れ、あるいは失われたのではなかつたか。

「物語」の持つ力。これをよくわかりやすい形で表現すれば、多くの人が「つながり」や

「絆」といった言葉の向こうにその価値を再認識したまさにそのことである。あらゆる場所であの日を過ごした多くの人がこのことについて改めて自らに問いかけるようになったからこそ、再び立ち上がろうとする人たちの「物語」に共感が生まれる。「エネルギー」という感覚の伝播によって人が「元氣」になるのである。「支援に行つたはずなのにこちらがエネルギーをもらった」多くの人々が肌身で感じたこの「エネルギー」の源泉は、「物語」の全部もしくは一部が失われたことよって改めて気が付いたその大きさや重さ、あるいは失われたことに対するやり場のない怒りや悲しみをこえて、再び「物語」をその手に取り戻し、紡ぎ始めようとする人間の意志がもたらす力である。

●それでは私たちは、「物語」にどのように向き合つのだろうか。

「あの日にあなたが経験したことを話してください」講演会やツアーでよく目にするテーマである。語り手には「誰かに聞いて欲しい」という想いがある。聞き手は容赦ない自然の力に胸

を痛め、現場で苦悩しながらも懸命に格闘した人々の強さに憧れる。辛く悲しい壮絶な記憶に「なにも出来ない」と無力感に苛まれて思考停止に陥るのではなく、自らの想像力に働きかけ、他人事としてではなく捉え、ひいては自分がどう向き合うかを考え抜くきっかけになればいい。あるいはこれを契機に、自らの人生を生きるうえで大切ななにかについてあらためて考えはじめることがあってもいい。

でも、ふと立ち止まって敢えて考えてみたい。はたして彼らの「物語」はその日から始まったのだろうか。この日が彼らの「物語」において極めて大きな意味を持つていることは無論疑いようがない。私たちにとってですらそうなのだから、彼らにとつてのそれは想像すら及ばないほど決定的に大きく重い。しかし、私たちが向き合つたのは、「その日の経験から今日まで」だけを生きる人たちののだろうか。彼らがその経験をしていたら、彼らが生きる土地に起こった出来事ではなかったら、私たちは彼らに、彼らの生きる土地にそれ以上の関心を持たないのだろうか。

「地」元の人がたくさん集まっ

て盛り上がっている様子を撮りたいからそこに立って置いて下さい」と、土地とは縁もゆかりもない観光客に声をかけて仮設店舗の前で写真を撮る「ジャーナリスト」。このままでは「経験の消費」が広がる懸念は拭えない。「あの日のことを話して下さい」という問いかけで、あなた目線の興味関心から彼らの経験を「消費」することを超えて、その視線の向こうに特定の経験や出来事があったという前提がなかったとしても、厳然と存在する一個の人間と彼らが生きる土地の「物語」に触れてみたくはないか。

●彼らが「忘れて欲しくない」のは、「長く続けて欲しい」と望んでいるものは一体何だろうか。

東北を歩きながら人々と語り合つうちに、少しずつ見えてきたことがある。

誰もが、つらく悲しいこと、ショックなことは出来るならば早く忘れたい。日々の大変な生活のことも、たまには忘れて息抜きがしたい。しかし簡単に忘れてしまうことが出来ないくらい重く大きな記憶が横たわる。失われた「物語」が大切であれ

想いを持つのは、彼らだけではない。

津波に流された男に、いつの間にか恋の悩みを相談される無二の友人になることもある。はじめて出会った地方紙の方が、お気に入りといつて名刺に刷り込んだ地元の人々の短歌に「祖母が歌をたしなんでいましたから、この意味が分かります」とたった一言自分の「物語」を話すことから長く続く新しい「物語」が始まることもある。その数の多寡を論ずることにほさして意味がない。

きっかけは様々でいい。みずからの「物語」を大切にすること。相手の「物語」に正面から向き合い、長く続く新しい「物語」を共に創っていくこと。多くの人が、このことのもたらす価値を感じて「いいね」と思えるようになることが、あなたを、東北のみならず日本を、ひいては世界の隅々を少しずつ豊かにしていくと信じている。

はあるほど、容易に忘れることなど出来るはずがない。それでもやがて、他からやってくる人たちと触れあい、語り合つうちに少しずつ心がほぐれていくことがあるだろう。世紀の大失恋をした人が、新しい人間関係を前に恐る恐る、でもまた少しずつ心を開いていくように。しかし、来訪者はしばしば遠く離れた土地からやってくる。あなたと楽しいひと時が過ごせたおかげで、つらい記憶と少しずつ向き合えるようになったのに。ようやく心を開いて互いの「物語」を語り合えたのに。あなたは元の場所に戻ったら、私のことを忘れてしまうんじゃないだろうか。ここに私という人間が生きていることを、この土地のことを忘れないで欲しい。ともに過ごした時間を忘れないで欲しい。ひとたびお互いに心を開き、お互いの抱えてきた「物語」を語り合い、ひとりの人間同士として向き合つたのだから、願わくばこの関係を長く続けていきたい。また会いに来て欲しい、会いに行きたい。多くを失った悲しみのなかで手にした新しい出会いを、再び失いたくない。人間として、とても自然で豊かな感情だと思ふ。そしてこの